

その翻訳にミュラーやタイラーの影響がみられるかという
と、イントロダクションではミュラーの概念である“Disease
of Language”という言葉が使われたり、タイラーの Anthro-
pology が引用されたりということが行われているが、研究視
点を利用してはいるわけではなく、翻訳のなかでも自然神話学的
な解釈などはみられない。そのためチェンバレンの古事記翻訳
のみで当時の神話学との影響をみることはできない。

そこで書簡資料からミュラーとの関係をみると、アーネ
スト・サトウがアストンに宛てた手紙によれば、一八八〇年に
イギリスに一時帰国していたチェンバレンは、オックスフォー
ドでミュラーと滞在していると記されている（一八八一年二月
一日付）。この時期は、ちょうど彼が古事記の翻訳にとりか
かっていた時期でもあった。チェンバレンによれば、ミュラー
は古事記の翻訳を試みてあきらめたという体験をもっており、
そうした状況を考え合わせると、チェンバレンが古事記を翻訳
しようとしたことに、ミュラーが影響を与えていたのではない
かと推測できる。

タイラーもチェンバレンと交流を持っていた。オックスフォ
ードにあるピットリバース博物館には、タイラーが集めたさま
ざまな物が収められているが、そのなかにタイラーがチェンバ
レンに依頼して集めた日本の民具やお札などが多数含まれてい
る。

タイラーとチェンバレンとの書簡については、タイラーから
の手紙の内容が一部紹介されていたが、チェンバレンから送ら
れたものは不明であった。昨年ピットリバース博物館でその手

紙が見つかり、調査したところ、そのなかにはチェンバレンが
はじめてタイラーに送った手紙と推定されるものがあつた。そ
の文面には、チェンバレンが日本の専門家としてヨーロッパの
学界に情報を提供しようという意気込みがにじみ出ている。

当時の宗教学、神話学は草創期で、新しい資料を世界中から
集め、盛り上がっていた時期であつた。ミュラーもタイラーと
いった時代を代表する研究者たちも開国したばかりの日本に目
を向け、情報、物を欲していたようである。チェンバレンは、
古事記翻訳の目的を古代日本の習慣や伝統、思考などを明らか
にし、ヨーロッパの研究者に引用されたり参照されたりする英
訳を提供することと述べていた。彼の解釈を交えない翻訳に
は、忠実な情報提供者であらうとした姿があらわれているとい
えよう。

世界神話学と世界宗教史

松村 一 男

本年五月、國學院大學において第三回国際比較神話学会議が
開催された。国際比較神話学会会長のハーバード大学マイケ
ル・ヴィツェル教授と國學院大學の平藤喜久子准教授が中心と
なり、ハーバード大学と國學院大學研究開発推進機構日本文化
研究所からご後援を頂いた。また日本文化研究所の所長である
井上順孝教授と研究所のスタッフの方々から多くの便宜を受
け、成功裏に会議を終えることができた。科学研究費補助金基

第13部会

盤研究(A)「大学における宗教教育文化の実質化を図るシステム構築」との共催という形を取ったため、宗教学と神話学の宗教文化教育における交流にも有意義だったと思う。

今回はそこで研究者たちのアプローチの前提となっていた世界神話学について、宗教史学における比較例として、エリアーデの「世界宗教史」も視野に入れて考えてみたい。

エリアーデは人類の初めから現在に到るまでの全歴史における宗教の諸相を一人で描き出そうという壮大な試みをへ信仰と宗教観念の歴史」として構想し、その著書『世界宗教史』の第一章を「時の始めに： 古人類の呪術・宗教的営み」と題して、旧石器時代から書き起こした。神話学でも同じことは可能はずだが、エリアーデのように単独で人類の全神話の歴史を描こうとした試みはない。ただ、それはより困難である。人類史はさらに遡って解明されつつあるし、神話が宗教以上に捕らえどころのない概念だからだ。言語を資料とする神話学が文字による記録のない時代についてどのようにその存在を推定できるかが、世界神話学が成立するためのカギとなる。世界神話学が従来の神話学と異なる最大の点は、大昔の資料からだけではなく、比較的現代に近い時代の資料も用いる手法であろう。それは洞窟壁画だけではなくミトコンドリアDNA (mtDNA) からも過去の人類の分布や移動や集団規模を推測しようとするのに似ている。一九七〇年代、分子生物学ではmtDNAを用いて人類の進化系統樹を作る研究が始まった。つまり現在からつながりを辿って過去に遡上していくアプローチである。神話についても同じことがある程度まで可能だろう。

人類の最初期から関心を持たれ、神話に語られてきたと思われるのは自然事象である。世界(大地、山、海、空、川など)、人間、動物、植物、天体、自然災害、火などだ。世界がどうやって存在するようになったのか、人間や動物はどうやって存在するようになったのか、なぜ人類は洪水で一度滅びかけたのか、太陽と月はどうのように存在するようになったのか、火はどのようにに獲得されたのか、といった神話モチーフは世界中に多く見られる。現在では世界中の神話モチーフのデータベース化が可能になりつつある。もともとデータ入力人間の作業だし、限られた専門家にしか出来ない高度な作業だから、まだ完成には程遠い。しかし、たとえばロシア、サンクトペテルスブルグの人類学・民俗学博物館のユーリ・ベレツィン教授が作成している神話のモチーフカタログでは一四〇〇以上が分類されている。神話モチーフが限られた分布を示すことはすでに一九世紀から知られていたが、世界神話学では遺伝子学で解明された人類の移動の経路と時代を神話モチーフの分布と重ね合わせる。すると神話モチーフの分布はある時代の人類の移動を示すことになる。エリアーデが宗教史において試みたのと同じように、こうした神話誕生と移動の歴史を世界神話学として一人の研究者が描きえるだろうかという問題に、今はまだ答えることはできない。ただ、未刊の著作を語るのは時期尚早かも知れないが、前述のヴィツェルがオックスフォード大学出版から刊行しようとしている『世界神話の起源』(*The Origins of World's Mythologies*)は、おそらくそのような試みが開始されるための方法論序説となるはずである。